

# 大阪狭山にも オオカミがいた!?

橋上猛雄

「地名は土地に刻まれた歴史」といわれ、「その土地の歴史と文化の縮図」ともいわれていま

す。大阪狭山市は地名研究に熱心なまちで、これまで『狭山の地名五十話』や『大阪狭山市史第十二巻 地名編』などが出版されてい

ていて、地名研究の成果が披露されています。その地名研究の過程において、様々なことがわかってきました。

れ、すでに明治八年(一八七五)の地券<sup>※</sup>では江戸時代に使われていた地名はほとんど記載されてい

ません。なぜ、半田だけ、明治の初期に小字名の整理がなされたのでしょうか。その理由については今

のところわかりません。しかし、市内で最も古い集落である半田

には、検地帳で見ると、本当に豊かな小字名がありました。その中で、半田地区だけにあつた動物に関する小字名があります。それは「オオカミ」です。

が、最後の例であるといえます。吉野の山奥ならまだしも、狭山に「オオカミ」なんて、と思われるでしょう。

『大阪狭山市史第十二巻 地名編』を執筆された上田宏範先生は同書に、「本市の動物地名に、今は絶滅してしまったオオカミが出てくるのは、特筆に値するであろう。半田の『延宝検地帳』に「おおかみ谷」「おふかめ押し」「大かめおし」の小字名がみ

える。延宝六年(一六七八)は今から三百六十年ほど前で、当時の人々にこの地名が使用されていたか、記憶されていたことを物語っている。「おおかみ谷」はオオカミの出没する谷、「おふかめ押し」はオオカミを捕獲する罠を設置した場所を指すものと思われる」と書いておられます。

半田の『延宝検地帳』を見ますと、確かに「おおかみ谷」が三筆、「おふかめ押し」が十筆、「大かめおし」が十筆と、都合二十三筆の土地が「オオカミ」に関連した小字名でした。

それでは、半田のどこに「オオカミ」を捕獲する罠を設置したのでしょうか。検地帳だけでは、

その場所は確定できません。確定するには、半田村の絵図が必ず必要になります。幸いなことに、嘉永四年(一八五二)に描かれた「半田村惣絵図」が存在します。そして、この絵図と対応する嘉永四年の検地帳も残されています。この二つを照合することで場所が確定されます。市教育委員会の調べでは、半田の集落の南端に「おふかめ押し」や「大かめおし」が集まっているのがわかりました。つまり、集落の南端に広い範囲で罠を仕掛けていたと考

えられます。

狭山にオオカミが来たとは信じられない、と思われる方もおられるでしょう。しかし、「オオカミ」の出没する谷である「おおかみ谷」が、半田の最南端にあること。また地域の南にある河内長野市にも、「ををカメダニ」狼谷」という小字名が存在することから、上田先生の説は有力な考

えだと思われる。

※明治初期に土地の所有権を示すために明治政府が発行した証券のこと

